

## 先天性視覚障害者のすみ字訓練

日本ライトハウス

荒井 洋 一

### はじめに

視覚障害者に対するすみ字訓練を考える時、その対象者は、視覚障害になるまですみ字を使用していた中途失明者、現在もすみ字が使用可能な弱視者、すみ字を使用した経験のない先天性視覚障害者に大別できる。それぞれについてすみ字に関する知識、活用場面が異なるため、対象者に合った目的を設定し、内容や指導方法を考案しなければならない。

いずれの場合にも言えることは、日本語は漢字仮名混じり文で成り立っており、日本語を正確に理解するためには、漢字に関する知識が不可欠であるということである。視覚障害のために、自分で書いた文字や一般の文書が読めないとしても、会話や仮名点字文、テープでコミュニケーションを図る際に、漢字を想起できるならば、日本語のより深い理解につながるであろう。

ここでは、先天性視覚障害者のすみ字訓練について述べることにする。

### 1. 訓練の目的

文字によるコミュニケーション手段として、表音文字である仮名点字のみを使用してきた先天性視覚障害者にとって、同音意義語を多く持つ熟語は難解であることが多い。漢字の持つ意味、発音及び用法を学習し、日本語文の中での漢字の使われ方に関する知識を習得することは、漢字の組み合わせである熟語を理解する手助けとなる。したがって、仮名点字文を読む、テープを聞く、会話をする際に、表現されるべき語句の漢字を想起することができるならば、日本語のより深い理解が可能となるであろう。すみ字を見ることができない、あるいは見たことがないという理由で、先天性視覚障害者を表音文字だけの世界に留めておくべきではないだろう。

また、浮き出し文字を読みとり、凸状マス目の中に文字を書き込んでいくす

み字訓練において、マスの中での線のつながり、複数の線の位置関係を学習することによって、平面図形のパターン認知や、空間座標の把握が促進されると考えられる。

実用的な面としては、メモや手紙を書くこと、オブタコン訓練や漢点字学習の予備知識として活用することができる。当訓練センターで初めてすみ字を学習した先天性視覚障害者から、すみ字で書かれた手紙を受けとったことがあるが、誤字やあて字はあるものの、コミュニケーション手段としての役割を十分に果たしていたことを憶えている。

## Ⅱ. 訓練の内容と方法

ここでは、当訓練センターで行っているすみ字訓練の内容と方法を紹介する。訓練時間は1年間で、60時間とし、各項目の時間数は大凡の割り振りであり、進度によって変更することがある。

### 1. 講義（2時間）

- ①訓練の目的及び活用場面を説明し、訓練に対する動機付けを行う。
- ②漢字、仮名文字の起源や構成について解説する。

### 2. 実技1（3時間）

- ①文字を書く上での約束事を決める。

例 「一」	横いち	「丨」	縦いち
「一」	横はね	「丨」	縦はね
「ノ」	左払い	「ㄨ」	右払い
「丶」	点	「ノ」	ノ立て
「ノ」	持ち上げ	「冂」	かぎ
「冂」	かぎはね	「冂」	かぎ曲げはね
「ㄣ」	縦曲げ	「ㄣ」	縦曲げはね
「フ」	横払い		

この段階で、実際に凸状マスのすみ字用紙（日本ライトハウス職業・生活訓練センター購買部で販売、3cm角、1.5cm角がある）と鉛筆を用いて、実際に

線を書く。その際に、用紙の使い方、鉛筆の持ち方、運筆、適度な筆圧、姿勢などを指導する。また、口頭での説明と実際の鉛筆の動きを一致させる必要がある。

#### ②マスの中での線の位置関係の学習

たとえば「一」と「丨」を使って、「ㄗ」、「⊥」、「ㄣ」、「ㄩ」を書いて見る。また「+」という字を書く場合、「一」と「丨」がマスの中心で交差する必要があり、そのためには「一」はマスの上下の中心を通り、「丨」は左右の中心を通らねばならない、ことなどを学習する。また、「丨」、「┌」、「一」の組み合わせによって「□」ができること、さらには、縦と横の長さを調整することによって「▭」、「□」ができることなどを習得する。このような学習によって、マスの中だけではなく、日常生活での動作に通じるような広い範囲での空間的位置関係の把握が促進されることも期待できる。また、必要に応じて、レーザーライターや立体コピーを用いて、訓練生自身に自分の書いた線を触察させる場合もある。

#### 3. 実技2（10時間）

①サーモフォームの浮き出し文字の教科書（日本ライトハウス点字出版所、やさしい文字教室、カタカナ・ひらがな編、1,210円）を用いて、カタカナ、ひらがなを学習する。浮き出し文字の触読において、線の群化や分化を含めた平面図形のパターン認知能力を養い、さらに、触運動知覚的事象の言語化を促進する。

②訓練生自身の必要や興味に応じて、同数字・アルファベット編（560円）を用いた学習を行う。

③仮名文字の定着のために、短文書き取りや作文を行う。

#### 4. 実技3（5時間）

部首の教科書（同、部首の名前と役目、1,210円）を用いて、偏、旁、冠、頭、構え、垂、続（にょう）などの部首について、名称、字形、意味を学習する。これによって、漢字の構成に関する具体例を示すことができる。

#### 5. 実技4（40時間）

同漢字編（1巻3,025円、2巻2,695円、3巻2,530円）を用いて、漢字のパターン、読み、熟語や語句の中での使用例、漢字の持つ意味を学習する。熟語や語句を学習する時、意味だけでなく、それらを用いた短文を作らせることによって、具体的な使用法を身につけることが大切である。

以上が先天性視覚障害者に対するすみ字訓練の基本的なプログラムであるが、その他に、応用力をつけるため、漢字に関する知識を増すため、また興味を高めるために次のような訓練を適宜行う。

#### 6. 応用

ここでは、応用力・知識の増加、文字に興味をもたせることが中心となる。

- ①同音意義語の学習
- ②同義語、対語、反対語の学習
- ③4字熟語の学習
- ④熟語を用いた漢字しりとりゲーム
- ⑤新聞記事などをリーディングし、その中で漢字で表わされるべき語句の漢字を想起する。

いずれの場合も、漢字の想起は、字形、音訓の読みかえ、漢字の意味、他の語句の中での使用例などで行う。

この先天性視覚障害者用のすみ字訓練プログラムが終了後、学習した文字を用いた書き取り訓練のクラスへ移行し、具体的場面での活用を通じて応用力をつける。

### Ⅲ. 指導上の留意点

①すみ字の学習は、数量的、内容的に学習量が非常に多いため、先天性視覚障害者が成人してから学習しようとしても、10数年あるいはそれ以上の年月をかけて、視覚を用いて学習してきたすみ字使用者のレベルに達するのは、たいへん困難である。したがって、先天性視覚障害児が点字を習得する際に、並行して徐々にすみ字を学習することによって、日本語文字に関する知識を与えることや、興味を持たせることが望ましいと思われる。点字を目で読むことのでき

る視力を持ちながら、漢字の学習がほとんど行われていず、知識がたいへん乏しい先天性弱視の訓練生もいた。最近では、盲学校の児童、生徒、普通学校で統合教育を受ける先天性視覚障害児に対するすみ字学習に目が向けられている。

②訓練生がすみ字を実用場面で使いこなせるようになることが最も望ましいが、訓練時間の不足、使用機会の少なさ、パターン認知、表現、記憶能力の低さなどの理由によって、学習の保持が十分でない訓練生も少なくない。すみ字訓練の第一の目的を、日本語文のより正確な理解とするならば、そのような訓練生に対しては、「書けること」だけに固執せず、漢字の読み、パターン、字義、用法に重点を置いて、訓練を進める方がよい場合もある。

③学習が進んだ段階では、点字文を読む時、テープを聞く時、会話をする時に漢字仮名まじり文では漢字で表されるべき語句について、その漢字を、字形、音読み、訓読み、字義、他の熟語での使用例などによって、意識的に想起する習慣をつけることが必要である。

④同じ先天性視覚障害者でも、すみ字の学習経験の有無、早期失明で視覚経験の程度、すみ字に対する興味の深さなどによって、すみ字に関する知識にかなりの差がある。たとえば、仮名文字は知っているが、漢字は知らないなどの、個人のレベルによってカリキュラムの内容、方法を変更する必要がある。